

## ハネとハ

我妻 多賀子

一 はじめに

現代語では、普通ハネ（羽根・羽・翅）という「鳥や昆虫、また飛行機が飛ぶためのつばさ」をいう。その他「鳥のからだの表面をおおっている毛」もハネといい、「赤いハネ募金」「ハネぶとん」「ハネつき」のように使われる。

一方ハ（羽）は、ハオト（羽音）、ハガイジメ（羽交締め）、ハバタク（羽撃く）、ハブリガヨイ（羽振りがよい）、オハ（尾羽）、ヌレバイロ（濡れ羽色）のように複合語の中に見出されるが、単独で使われた例はまずない。

ところが、古文ではハを単独に用いた例がある。たとえば、『古今和歌集』には

\* 蟬の羽（は）の夜の衣はうすけれどうつり香（が）濃くも匂ひぬるかな

（十七・八七六）

のように、複合語ではないハの例が見出される。

ついでにいうと、『古今和歌集』にはハネの例も左のようにすっかり使われている。

\* 白雲に羽(はね)うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月

(四・一九一)

右に挙げた二例を見ると、「蟬」と「雁」の違いはあるが、ハ・ハネ共に「飛行のためのはね」をいい、意味的な相違はない。要するに、現代でこそハネとハはその使い分けがはっきりしているが、以前はこの二語が同義で使用されていた時期があったことになる。となると、それはいつたい何時ごろまでさかのぼることができ、また、どのあたりまで続いたのだろうか？　そして、同じように使われていた時期には、両語に何か使い分けがあったのだろうか？

そんな疑問点を説明すべく、ハネとハについてその意味の変遷を辿ってみることにしたい。以下、時代別にこの二語を比較するような形で述べていくことにする。

## 二 上代

言うまでもないことだが、この時代の作品は漢字で書かれているため、よみがはつきりしない。つまり、一字一音書きの万葉仮名表記であれば、用例として取り挙げるのに問題はないが、漢字で書かれている場合にはハネかハかそのよみは不分明である。ただ中には、一字一音書きの例もあり、この時代の用法も是非知りたいので、今回は上代については底本のよみにしたがって考察を進めることにした。(注1)

まず、わが国最古の文学と言われる『古事記』には、ハネの例はなく、ハが三例用いられている。

\* 其の矢の羽(は)は、其の鼠の子等皆喫ひつ。

(上)

\* 故、高木の神、其の矢を取りて見したまへば、血、其の矢の羽(は)につけり。

(上)

\* 爾に即ち其の海辺の波限(なぎさ)に鶺鴒の羽(は)を葺草(かや)にして、産殿(うぶや)を造りき。(上)

右のうち、最初の二例の「矢の羽」は、武器である矢につける「鳥の羽毛」を指し、「矢羽」とも言われる。後世まで使われていたらしく、十二世紀末に成った古辞書の『色葉字類抄』には、前田家本、黒川本共に「羽 ハ 箭羽也」と出ている。

最後の例は、有名な神武天皇誕生のところで、海辺の波打ち際に鳥の一つ鶺鴒の羽を屋根に葺いて産室をつくったとい

う話になっている。つまり、右の三つのハはいずれも「鳥類の羽毛」を指していて、現代語ならさしずめハネというところであろう。次に『古事記』から八年後に成った『日本書紀』では、ハが七例、ハネが一例見える。まず、ハの場合、最初の一例は

\*白鷺(かがみ)の皮を以て舟につくり、鷓鴣(さざき)の羽を以て衣にして潮水(しほ)のまにまに浮き到る。

(神代上)

というもので、薬草の一種であるカガミの皮でつくった舟に乗りサザキの羽を衣にして出現した少彦名命のことを述べている。サザキは鳥類の一つミソサザイを指し、ハは「羽毛」の意である。次の二例は、先に『古事記』で見えてきたのと同じ神武天皇誕生の記事にある。

\*全く鷓鴣(う)の羽を用(も)て草(かや)にして簞けるに・・・

(神代下)

\*即ち鷓鴣(う)の羽を以て、葺きて産屋(うぶや)をつくる。

(神代下)

これらは「鷓鴣」と「鶺鴒」という表記上の相違はあるが、いずれも産室を作るために鳥のウの「羽毛」を用いたという点で記紀共に内容が一致している。続く四例は、左のように連続して出てくる。

\*高麗のたてまつれる麦疏(ふみ)、鳥の羽に書けり。字(な)、羽の黒きままに既に識(し)る者(ひと)なし。

辰爾、即ち羽を飯(いひ)の気(け)に蒸して帛(ねりきぬ)を以て羽に印(お)して悉に其の字を写す。

(敏達元年)

右の場合、ハはどれもカラスの「羽毛」を指し、そこに書いてある字が黒くて読めないのが、工夫をして読めるようにしたことが述べられている。

以上が『日本書紀』のハの例で、ミソサザイ・ウ・カラスと別々の鳥類ではあるが、すべて「羽毛」の意を表している。

続いてハネは

\*肅慎、乃ち船師(ふないくさ)をつらねて羽を木に繫けて挙げて旗とせり。

(齊明六年)

と使われている。この場合、前後に説明がなくよくわからないが、木にかけて旗としたというのだから、ハネは多分よく目立つ大きな「鳥の羽毛」を指しているものと思われる。以上、『日本書紀』では、ハ・ハネ共に同義で使われているが、数の上ではハがハネをだいぶ上回っている。次に『万葉集』を見ると、単独のものとしてはハ二例、ハネ三例が出

てくる。

\* 水鳥の鴨の羽(は)の色の春山のおぼつかなくも思ほゆるかも

(八・一四五二)

\* 水鳥の鴨の羽(は)の色の青馬を今日見る人は限りなしといふ

(二〇・四四九四)

\* 「鴨ガ」わが尾には 霜な降りそと 白妙の羽「波祢」さし交へて・・・

(二五・三六二五)

\* 梅が枝に鳴きてうつろふ鶯の翼(はね) 白妙に沫雪を降る

(二〇・一八四〇)

\* 天雲に翼(はね)うちつけて飛ぶ鶴のたづたづしかも君いまさねば

(一一・二四九〇)

最初のハの二例は、類似した使い方で、水鳥の一種である鴨を対象とし、その「翼」の意味で使われている。(注2) ハネの方は、一字一音書きの確例が鴨、あとの二例は鶯・鶴といずれも鳥についていう。つまり、『万葉集』でもハ・ハネ共にすべて鳥を対象にしているが、ただその意味は、これまで記紀で見えてきた「羽毛」ではなく、「飛行のための翼」にとれる。要するに、記紀のハネとハは、鳥の身体から抜き取った一枚一枚の羽の意味であるが、『万葉集』では、まだ鳥の身体についている羽を指している。漢字の「翼」をハネとよんだり、動詞の「さし交ふ」や「飛ぶ」と併用された例が出てくることから、この事実が傍証できる。

また『万葉集』の場合、単独のハネ・ハの例は右の五つだが、複合語としては他にいくつか使われている。例えばハネでは、

\* 埼玉の 小埼(をさき)の沼に 鴨そ 翼(はね)きる 己が尾に ぶりおける 霜を はらふとにあらし

(九・一七四四)

という例がある。ハネキルは「水鳥が翼を強く振ってしぶきを立てる」意を表す一語の四段活用動詞である。

またハの方は、アキツハ(蜻蛉羽)、オホヒバ(覆ひ羽)、サシハ(翳・貴人後ろからさしかけるうちわのようなもの)、シノキハ(志乃岐羽・矢羽の一種)、ヒヒルハ(蛾羽)、ヲハ(尾羽)のようにハが後項についたものと、反対にハオト(羽音)、ハガヒ(羽交)、ハグクム(育む・ハ《羽》ククム《含む》の意)、ハグクモル(ハグクムの受動形)、ハブク(羽振く)、ハブル(羽振る)のように、ハが前項についたものがあり、ともかく複合語としてのハが非常に多い。「一 はじめに」のところでは述べたように、現代語でもハはほとんど単独では使われないことから推して、古くからハは、どちらかというと複合語として用いる傾向が強かったようだ。

以上、記紀万葉における用法について概観してきたが、『風土記』や『宣命』など他の上代文献では、私の調べた限り、ハネもハも使用されていなかった旨追記し、続いて中古の用法を見ていくことにしよう。

### 三 中古

今回の調査に際し、中古は三十以上の作品に当たってみたが、かなり偏った結果が主としてハに現れた。すなわちハはわずかに八作品にしか使われていず、しかもそのうち七作品では使い方が左のようにほとんど同じであった。(注3)

\* 蝉の羽(は)のひとへにうすき夏衣なればよりなん物にやはあらぬ

〈古今・十九・一〇三五〉

\* 夏せみの羽(は)におく露のきえぬまにあふべき君をわかれてふ哉

〈宇津保・吹上上〉

\* わが身むなしき 蝉の羽(は)の いましも人の うすからず

〈蜻蛉日記・上〉

\* 前驅(さき)すこしおはする車とどめておるる人、蝉の羽(は)よりもかるげなる直衣・指貫・生絹(すずし)

のひとへなどきたるも・・・

〈枕草子・三三三〉

\* 空蝉の羽(は)におく露の木がくれてしのびしのびに濡るる袖かな

〈源氏物語・空蝉〉

\* 蝉の羽(は)も裁ち変へてける夏衣かへすを見てもねは泣かれけり

〈源氏物語・夕顔〉

\* なく声はまだきかぬども蝉の羽(は)のうすき衣はたちぞきてける

〈拾遺集・二・七九〉

右に掲げたものが『今昔物語集』を除くハの全用例になる。これを見れば一目瞭然、「一 はじめに」のところでは「古今和歌集」の例と同じで、ハはすべて昆虫の蝉を対象としている。しかも、その使い方はよく似ていて、大半が「夏衣」と併用されるか、「薄い」とか「軽い」、そして「上に置いた露がすぐ消える」などの形容語と共に使われている。

この場合、蝉のハは「羽毛」ではなく、蝉の身体についている「飛行のための羽」ととれる。上代のハがどれも鳥類についていい、しかも「羽毛」の意で使われていたことから比べると、これは中古に入ってから大きな特徴といえるのではないだろうか。なお、現代でも薄くて透けるような着物を、蝉の羽にたとえていうことがあるが、ハではなくハネというのが普通であろう。ところで、中古でただ一つ蝉以外のハの例が出てきた『今昔物語集』については、この時代の他の作品におけるハネの用法を見てから言及することにした。

さて、その中古のハネは、ハよりも用例数が多いとはいえ、ほとんどの作品で五例以下という少なさであった。中で最も多く用いられていたのは『源氏物語』で、全部で八例出てくる。それをまず左に列挙してみよう。

\*朝夕の言ぐさに「翼(はね)をならべ枝をかさはさむ」と契らせ給ひしに・・・ (桐壺)

\*長生殿の古きためしはゆゆしくて、翼(はね)をかさはさむとは引きかへて弥勒の世をかねたまふ。

\*羽を並ぶるやうにて、おほやけの御後見をもつかうまつる。

\*おほやけにつかうまつりし際は羽をならべたる数にも思ひ侍らで・・・ (行幸)

\*みやま木に羽うちかはし居る鳥のまたなくねたき春にもあるかな (真木柱)

\*はねうちかはす雁がねも・・・ (横笛)

\*池の水鳥どもの羽うちかはしつのおのがじしさへづる声などを・・・ (橋姫)

\*泣く泣くも羽うち着する君なくは我ぞ巢守になるべかりける (橋姫)

右の例から『源氏物語』のハネは、大きく三つに分けられる。すなわち、まず一つ目は、動詞ナラブと併用されたものである。これは『長恨歌』にある「天ニ在リテハ、願ハクハ比翼ノ鳥トナリ」という有名な句を元にした言いまわしで、「比翼ノ鳥」とは、雌雄各々翼一つ、目一つで二羽一体となって飛びくる想像上の鳥を指す。つまり、男女の間がむつまじいときに、その例として使われるのが「ハネをナラブ」になる。そしてこの例は、『源氏物語』以外にも左のように使われている。

\*鳥ノ二ノ翹尔(ハネ)車ノ並ベル輪ノ如シ。(三宝絵・上)

\*木にもおひずはねもならべでなにかも浪ちへだてて君をきくらん (拾遺集・八・四八二)

\*翼(はね)ならぶ鳥となりては契るとも人忘れずばかれじとぞ思ふ (栄花物語・二)

\*立ちも居もはねをならべしむら鳥のかかる別れを思ひかけきや (夜の寝覚・二)

二つ目に『源氏物語』のハネの用法で、ナラブと同じように多いのは、動詞カハスやウチカハスとの併用例である。カハスは漢字にすれば「交はず」、つまり「互い違いにすること」で、ハネについていえば、やはり仲むつまじいことをいい、ナラブとほぼ同意になる。これは、「一 はじめに」のところ述べて『古今和歌集』の例が相当するが、その他

に、左のようなものがある。

\*生きての世死にての後ののちのよも羽をかはせる鳥となりなん

〈大鏡・師尹〉

三つ目は、最後に挙げた橋姫の例で、これは前の二つとは意味が異なる。この場合、歌を詠んだのは中君で、「君」は父の八宮を指す。通釈すると「泣きながらも羽を着せて育ててくださった父君がもしいらつしやらなかったとしたら、私は孵化できずに巢に残っている卵のようになってしまったことでしよう」となり、ハネは大きく広げて包み、大切なものを育てるもの、要するに「庇護する」意で使われている。これは、上代の『万葉集』に出てきたハの複合語ハググムやハグクモルに通じるものである。そして、この意味を表すハネもまた、他の中古の作品に使用例がある。

\*水際に 番（つが）はぬ 鴛鴦（をし）は 寂しくて ふたりの羽「両親ノ庇護」の 下にだに せばくつど

ひし 鳥の子の 雲の中にぞ ただよひし・・・

〈榮花物語・九〉

\*ひとりの御羽のしたに四所をはぐくみ奉り給ひつつ・・・

〈夜の寝覚・一〉

以上、大きく三つの意味に分けて考えられる『源氏物語』のハネは、他の中古作品でも何例か出てくるので、当時の平均的な使い方であったと思われる。

その他、中古におけるハネの用法を見ると、まず鳥の特性である羽ばたいたり飛んだりするさまをいう例がある。

\*まことにて名にきくところはねならばとぶがごとくにみやこへもがな

〈土佐日記・一月十一日〉

\*木末に郭公の羽うちはぶき渡るさへ、いみじきに・・・

〈夜の寝覚・二〉

\*今はとてこしちに帰るかりがねはねもたゆくやゆきかかるらん

〈金葉集・一・二八〉

\*御首に乗り居て左右の羽を「御目ノ上ニ」うちおほひまうしたるに、うちはぶき動かす折にすこし御覧ずるなり。

〈大鏡・三條院〉

\*白雲にはねうちつけてとぶ鶴の遙かに千世のおもほゆるかな

〈千載集・十・六二四〉

また、大きな羽を広げている様子をいうのも、まさに鳥にふさわしい。

\*雉は紺青のやうにて、はねうちひろげて居てさぶらひしほどは・・・

〈大鏡・道長〉

ところで、右のように動きを伴ったハネの状態をいうのではなく、その上に霜などが降りたさまをいうものもある。

\*水鳥、鴛鴦いとあはれなり。かたみにあかはりて羽のうへの霜はらふらん程など。

〈枕草子・四一〉

\*わが上は千鳥もつげじ大鳥のはねにも霜はさやはおきける

〈和泉式部日記〉

\*みやこどり千鳥をはねにすゑてこそ浜の土産（つと）とて君にとらせめ

〈宇津保物語・吹上上〉

\*夜をさむみはねもかくさぬ大鳥のふりにし霜の消えずもあるかな

〈宇津保物語・初秋〉

さらに、鳥の声についてハネのうちで鳴くという言い方もあった。これはくぐもつて聞こえにくい声をいうようだ。

\*鳥の声も、はじめは羽のうちで鳴くが、口を籠めながら鳴けば、いみじう物ふかくとほきが、明るるままに

近く聞こゆるもをかし。

〈枕草子・七三三〉

その他、これといった併用語もなく、特別な動きも伴わず、ただ鳥のハネという例も多かった。

\*「羽根といふ所は鳥のはねのやうにやある」といふ。 〈土佐日記・一月十一日〉

\*さざら波たつをばしらで川千鳥はねいかなりと〔翅ガ濡レルトカ何トカ〕人につぐらん

〈宇津保物語・藤原君〉

\*大鳥のはねや片羽になりぬらんいまは乙箭にしものふるらん

〈宇津保物語・初秋〉

\*羽あるものは前の足なく、角あるものはかみの齒なきことに侍るを・・・

〈今鏡・三三〉

\*馬にて参れば苦行ならず、空より参らむ、羽賜（た）べ若王子

〈梁塵秘抄・二五八〉

\*羽なき鳥の様（やう）かる〔風変ワリデアル〕は、炭取、楯取（かいとり）、楯（かい）もとり、石（いしな）

〈梁塵秘抄・三五七〉

取り、虎杖（いたとり）・・・

〈宝物集・二二〉

\*しかのみならず、鶯は羽のためにころされ、虎は皮のために命を失ふ。

ところで、右に挙げた何例かのハネは、どれも鳥を対象とし、しかも身体についた翼（つばさ）の意で使われている。そして、ハネが上代と同じ、一枚の羽毛の意で用いられていたのは、今回の調査では左の一例だけであった。

\*鳥の羽に御文をつけて・・・

〈和泉式部日記〉

右は、歌を記した手紙を結びつけるというのだから、この場合の鳥の羽は、明らかに身体から抜き取った一枚の羽毛を指している。

さらに注目すべきなのは、中古のこれまでの例がすべて鳥を対象としていたのに、昆虫についていう例が出てきたことである。

\*きぬとて人々の着るも、蠶(かいこ)のまだ羽(はね)つかぬにし出だし、蝶になりぬれば、いともそでにて  
あだになりぬるをや。  
(堤中納言物語・虫めづる姫君)

虫については、蟬を対象としたハの例が中古になっていくつも出てきたのに、蝶をいうものは上代にもなく、中古に入ってもこれが初めてである。以上、中古のハネをざっと見てきたが、この際気をつけなければならないのは、漢字の「羽」の場合、これをハ・ハネのどちらでよんでいたかである。つまり、校異が問題となるが、今回の用例について異文があるかどうか調べてみたところ、いずれもよみは、底本通りハまたはハネのどちらかで決まっていた。よって、これまで記した用例のよみはすべてそのままとつていいと思う。

さてここで、中古の最後に、さきその後回しとした『今昔物語集』の例を取り挙げることにしたい。実はこの作品ではハネ六例、ハ十二例と、他のものに比べて断然用例数が多い。したがって、大いに考察の対象になるはずのところ、そのよみがかなり確実性に乏しい。原文にもルビがついていたり、いなかたりし、しかもハとよんでいるところに「ハネとよむも可」と頭注があつたりする。(注4) そこで、今回はもっぱら索引のよみに従つて考察を行った。(注5) その結果、まずハネ・ハ共に対象としていたのは、どれも鳥およびそれに類するものであり、昆虫の例はなかった。ただし、中古の他の作品に見られた動詞ナラブ、カハス、トブ、ハブク、ヒログなどとの併用例はなく、新たに生フ、開ク、扇ギ干ス、乗ルと共に使われたものが、ハネ・ハの両方にあつた。

\*実二羽(ハ) 生ヒズ、龍ニ乗ラズハ渡ルベカラズ。

(五ノ四)

\*我が身、左右ノ脇ニ忽チ二羽(ハネ)生(ハエ)ヌ。

(一五ノ一九)

\*二郎子羽(ハ)ヲ開キテ迷フ事カギリナシ。

(一九ノ八)

\*金翅鳥羽(ハネ)ヲ以テ大海ヲ扇(アフ)ギ干シテ・・

(三ノ九)

\*我が羽(ハ) 二乗ルベシ。

(注6) (四ノ三六)

また、「庇護する」意で使われていた例がハにあつたが、ここは本文ではルビがなく、索引にハとあつたので、あるいはハネとよんだ方がふさわしいのかもしれない。

\*其ノ羽(ハ)ニ隠レテヤブラレズシテ有ツル。

(一〇ノ三一)

その他、問題なく「羽毛」の意にとれるものとして、左の二例があつた。

\* 或ハ幡（ハタ）ヲ持チ、或ハ鉾（ホコ）ヲ捧ゲタリ、或ハ鬪（ハ）ヲ差シ、或ハ櫛ヲ取レル者、カズ知ラズ多カリ。  
（二〇ノ三三）

\* 鳥ノ羽（ハネ）ヲ以テ日ニ五六度付ク許也。

（二四ノ八）

最初の例のハは、「車や輿などにかざしてかげを作るもの」で、「羽蓋」ともいい、明らかな「羽毛」の意味になる。漢字の「鬪」は『和名類聚抄』や『類聚名義抄』で、ハネではなくハとよんでいるから、ここは多分正しいよみ方である。二番目の例は、鳥の羽を使って薬をつける場面で使われているので、このハネは、身体から抜き取った一枚の羽、つまり「羽毛」になる。ただここは、ルビがふつてないので、索引ではハネとよんでいるが、意味から推して、ハの方がよいように思われる。さらに、『今昔物語集』には、単純な鳥の羽として使われた例もいくらかあったが、ともかくこの作品はよみが不明瞭で用例として挙げるのには、いくぶん躊躇せざるを得ない。それでは、以上で、中古のハネ・ハについての考察を終え、続いて中世以降の作品における使い方を考察することにした。

#### 四 中世以降

中世および次の近世についても、数にして三十ばかりの作品に当たってみたが、総じて用例数が少なかったため、以後両時代とりまとめて見ていくことにしたい。初めに、これまでと同じようにハの用法から見えていく。中古では、『今昔物語集』を除いて、ハはもっぱら蟬のハとして使用されていたが、この例は中世以降もわずかではあるが見られた。

\* 蟬（せんげん）たる両鬢は、秋の蟬の羽（は）にことならず。

（御伽草子・物くさ太郎）

\* 空蟬のはにおく露の木がくれて忍び忍びにぬる袖かな

（狂言・蟬）

\* 山鳥とび来てさもなさけなくはへ、足手も羽をもひきむしり、なさけなくつつきくへば・・・

（狂言・蟬）

次に、ハが上代と同じ「羽毛」の意で用いられていたものには、左のような例があった。

\* 高麗よりからすのはに物をかきてたてまつりたりしを・・・

（注7）（水鏡・中）

\* さて郡司に金、馬、鷲の羽などおほくとらす。

（宇治拾遺物語・九ノ一）

\* 御門感じおぼしめして水鳥のおとしおきたる羽をとりて、餓死の口にそそきたまへば・・・

\*とある木蔭に孔雀の羽の落ちけるを拾ひ取つて・・・

〈仮名草子・伊曾保物語・中〉

ところで、同じ「羽毛」でも、中世になつて群を抜いて多くなるのは、いわゆる矢の材料として使われるものである。

これは、先に上代の『古事記』のところでも一寸触れたが、武器の一つである矢を作るために、鳥のハを「矧(は)ぐ」ことをしたらしい。「矧ぐ」とは、竹に矢じりや羽をはめることで、軍記物語の多い中世で、ハをこの意味で用いる例が圧倒的に増えているのは、十分納得がいく。左に各作品から一例ずつだけ挙げてみたが、いずれの作品にも同様な例は複数見られた。

\*鷹の羽にてはいだりける的矢一手ぞさしそへたる。

〈平家物語・四〉

\*羽はとび・ふくろう・からす・庭鳥の羽をさらはず藤作(とうはぎ)にまきたり

〈保元物語・上〉

\*白篋(しらのか)に白鳥の羽にてはぎたる矢尻(やをい)、笛藤の弓持て・・・

〈平治物語・上〉

\*鶴(くくひ)の羽を以てはぎたる征矢(そや)の・・・

〈太平記・一三〉

\*嫡子泰衡(やすひら)白皮百枚、鷲の羽百尻、よき馬三疋・・・

〈義経記・二二〉

続いて、ハでも「羽毛」以外の意味、つまり「翼」の意を表すものが、中世・近世では盛んに使われていた。

\*桃華の節会の鶏の心をください、羽をつがひ、勝負を争ふ鶏あはせも、これにはすぎじとぞ見えける。

〈曾我物語・一〉

\*池のはたに羽をとちて鴛鴦の浮寝ものさびし。

〈御伽草子・鉢かつぎ〉

\*親孝行の鳥は、生まれたる木の枝に、百日が間、日に一度うつ来りて羽をやすむるを・・・

〈御伽草子・蛤の草紙〉

〈御伽草子・蛤の草紙〉

\*大木の梢にも羽を敷き、波の浮葉をまかけよかし。

〈謡曲・善知鳥〉

\*一声の山鳥羽をたたく。

〈謡曲・山姥〉

\*羽を垂れ地に伏せば・・・

〈謡曲・鷲〉

\*羽をのし、はしをならすとも命のあらんその程は・・・

〈謡曲・楠露〉

\*「雀ガ」ことばにていひてはをひろげているべし。

〈狂言・松山〉

\*白燕濁らぬ水に羽を洗ひ

〔俳諧・冬の日〕

\*鶯の羽もかいつくろひぬはつしぐれ

〔俳諧・猿蓑〕

右に挙げた何例かのハは、中古だつたらば、ハネであつたはずのものであろう。それなのに、これだけ多くの「翼」の意のハが使われているということは、時代が下つて、ハの用法がだいぶ拡大して来たといえるのではないだろうか。ただし、よく見ると、右の諸例のほとんどで、併用された動詞に、ある特徴が見出だされる。すなわち、ハと共に使われている動詞は、ツガフ・トツ・ヤスム・タル・アラフ・カイツクロフなどで、「翼」とはいえ、大きく広がった様子を表現してはいない。広がりを表す動詞でも、シク・ノスなど、平面的で、大空を飛翔する立体的・動的な様子とは程遠い。また、動きを示すタタク・ヒログなども、それぞれ山鳥・雀という小さな鳥の行為で、力強さは感じられない。これまでは、鳥を対象とした場合、ハは「羽毛」の意が大半を占め、ハネは「翼」の意で、サシカフ・ナラフ・カハス・トブ・ハブクなど、顕著な動作を表す語と併用されることが多かった。とすると、同じ「翼」の意でも、ハはどちらかという

と静的で穏やかな動詞と共に使われることが多く、ハネは、いかにも本来の「翼」の役目を表した勢いの感じられる動詞と併用される傾向が強かつたのかもしれない。ただこれは、同じ時代におけるハとハネを比較検討する必要があるもので、以下、中世以降のハネについて見ていくことにしたい。

まず、この期のハネもその大半が鳥を対象とし、そのうち「羽毛」の意を表すものには左のような例があつた。

〔十訓抄・七ノ五〕

\*敏達天皇御時、高麗ノ表ヲ鳥ノ羽ニ書テ奉リケル。

〔十訓抄・七ノ五〕

\*羽ラムシテ、フクサノキ又ニオシケレバ・・・

〔十訓抄・一〇ノ七六〕

\*多ノ金・鶯ノ羽・絹布ヤウノ財物ヲモタセテ・・・

〔沙石集・八ノ二三〕

\*はねをぬひてとらせうぞ。

〔狂言・鶉舞〕

\*「鳥ガ」孔雀の羽を見つけて、ここかしこに纏（まと）ひ・・・

〔天草本伊曾保〕

\*はねのぬけたる黒き唐丸〔中国原産ノ鶏ノ一種。大形テ尾ガ短イ〕

〔俳諧・ひさご〕

\*上は緋段子（ひどんす）に、五色のきり付け・はね・羽子板・破魔弓・玉ひかりをかざり・・・

〔西鶴・好色一代男・六〕

\*此女、袖より内裏はごいたをとり出して、独はねをつきしに・

(西鶴諸国はなし・三)

\*櫛箭鏡台かたづけ、ちりはくはねの二つ羽もひよくの悪縁そこふかき・ (近松・鐘の権三重帷子)

右のうち、『十訓抄』の最初の二例は、すでに『日本書紀』や『水鏡』に出てきた敏達天皇の記事と同じであり、そこでは「羽」をハとよんでいた。三例目も先に掲げたように、同様のものが『宇治拾遺物語』にあり、そこでも「羽」はハであった。なお、『十訓抄』の原文を見ると、いずれも漢字「羽」で書かれていて、よみははつきりしない。ハネというよみは索引(注8)によったが、むしろここは他の作品の同じような例から類推して、ハとよむべきではないだろうか。次の『沙石集』の例も原文は漢字で書かれている。こゝも、よみは索引(注9)に従ったが、少し後に、明らかにハネとよむ例があるので、それに影響されてハネとよんでいるような気がする。意味的には「羽毛」の意にとれ、しかも『沙石集』は『十訓抄』とそれほど成立年代も隔たっていないので、どちらかというところの例もハとよんだ方がふさわしいように思われる。要するにここまでものは、「羽毛」の意味を表すハネの例として取り挙げるのには、いささか抵抗がある。その次の狂言の例は、「ハネ」を抜くということで、「羽毛」の意にとれるが、この部分、大藏虎明本では「はね」と平仮名で書かれている。狂言は『十訓抄』や『沙石集』に比べると、成立したのが二百年近くも後になるので、おそらくこの頃には、「羽毛」の意でハネを使うようになっていたものであろう。六番目に挙げた『天草本伊曾保』の例は、原文がローマ字表記で、「羽」の部分で *fanuo* となっている。内容的には、カラスがクジャクスのハネを見つけて身にまとうということから、ハネは明らかに「羽毛」の意にとれる。内容的には、カラスがクジャクスのハネをいわれ、中世もほぼ終わる時分である。結局、ここまで時代が下がると、ハネを「羽毛」の意で使うことがますます普通になっていったのではないだろうか。残る近世作品における四例は、どれも問題なく「羽毛」の意にとれる。特に西鶴の二作品の場合、いわゆる女の子のお正月遊びの一つ、羽根つきのことを述べていて、この稿の「一 はじめに」のところでも触れたような、現代語でも時々耳にする例になる。以上、中世半ばくらいからハネの用法範囲が広がって、主としてハが表していた「羽毛」の意味も積極的に取り入れるようになり、現代にまで至っているものと考えられる。

ところで、「羽毛」ではなく、「翼」の意を表すハネも、中古に引き続き、中世以降も盛んに使われている。以下、用法別に少しずつ用例を挙げていくことにしたい。最初にハネが大きな動作を表し、ナラブ・ウチカハス・トブなど、勢いのある動詞と併用されたものは、中古と同様、相変わらず用例が多かった。

\* たちも羽をならべしむらどりのかかる別れを思ひかけきや

〈無名草子〉

\* 白浪にはねうちかはし浜千鳥悲しきものはよゐの一声

〈新古今・六・六四四〉

\* 羽なければ空をも飛ぶべからず。

〈方丈記〉

\* 我が左右の脇より羽の生ひ出でとびぬべくおぼえければ・・・

〈発心集・七ノ二二〉

\* 「雀ガ」羽をふためかして「バタバタ音ヲサセテ」感ふ程に・・・

〈宇治拾遺物語・三ノ一六〉

\* 空ヨリ玄鶴十六飛来テ、ハネヲヒロゲ頭ヲノベテ・・・

〈十訓抄・一〇ノ六六〉

\* 鳥共ノイヒケルハ「我等ハ羽ヲモテコソ空ヲ翔（カケリ）、食ヲ求メテ命ヲ助（タスク）レ。

〈沙石集・八ノ二三〉

\* 差タトハ燕ノ羽ヲソハメテ飛ブ白也。

〈中華若木詩抄・上〉

\* 松のあひあひ皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契りの末も・・・

〈芭蕉・奥の細道〉

\* あかりしやうじ二枚両脇には生まれしが、そのまま羽となつて飛ばれける

〈西鶴諸国はなし・四〉

他に併用された動詞としては、既に出てきたフル、オフ、ハフの他に、新たに折ル、付クなどがあった。

\* 梅が枝になきてうつろふ鶯のはね白妙にあは雪ぞふる

〈新古今集・一・三〇〉

\* 此の羽に生ひたる字

〈発心集・七ノ二二〉

\* 大なるくそとびの羽折れたる、土におちてまどひふためくを・・・

〈宇治拾遺物語・二ノ一四〉

\* 春宮を吉野山にこめつるは虎に羽をつけて野に放つものなり。

〈宇治拾遺物語・一五ノ一〉

\* はねもはへぬものをとばせて・・・

〈狂言・柿山伏〉

その他、これといった動詞を伴わず、単純に「カムフリノ羽」「狂言・ざせん」、「鶴ノハネ」〔中華若木詩抄・上〕などという例もあったが、中でも以前よりこの期で増えていたのは、ハネがない状態を述べたものである。

\* 「殺テ羽取ラム」ト云。

〈十訓抄・一ノ七〉

\* 天人も羽根なき鳥の如くにて・・・

〈謡曲・羽衣〉

\* 虎トオモウテ射タレバ、羽ブサマデ射コム也。羽ヲ没（カクス）トモ、羽飲（カクス）トモ云フゾ。

〈中華若木詩抄・上〉

\*主人走り寄つて、鳥を取りて、「奇怪なり。いましめて命を絶つべけれども」と羽を切つてぞ放しける。

〈仮名草子・伊曾保物語・下〉

\*稲屑鳥（いなおせどり）は羽のなひ牛のことかと・・・

〈西鶴・好色一代男〉

右のように、トル、カクス、キルなど動詞と共に使われたものも含め、思いのほかハネのない様子という例が多かつたのは、あるいはこの時代を反映してのことであろうか。また、注目すべきなのは、静的な動詞との併用例がハネにもあつたことである。

\*たとへば鳥類などだにも縁有る枝に羽をやすめるぞかし

〈御伽草子・蛤の草紙〉

\*「鳥ガ」羽を垂れて啼く。

〈御伽草子・福富長者物語〉

ただこれは、両方とも同じ『御伽草子』の例で、原文が漢字「羽」で書かれ、ハカハネかよみかはつきりしない。先に掲げた『御伽草子』ハの例は、動詞トツ・ヤスムと併用されていたが、原文の「羽」に、振り仮名のハがついていたり、ハという平仮名表記だったので、よみは明らかにハである。漢字「羽」の例をハネとよむのは、索引(注10)によつたが、もしかしたらこども、ヤスム、タルという動詞の性質から推して、ハとよんだ方がいかもしれない。以上、「翼」の意を表すハネは、用法的にきわめて多種多様であつた。なお、鳥以外に使われていたハネには左のような例があつた。

\*蝶のはねをひろげたるやうに、左右の袖をひろげて・・・

〈平家物語・八〉

\*「蝶ガ」明け行く雲に羽根うちかはし、明け行く雲に羽根うちかはして、霞に紛れて失せにけり。

〈謡曲・胡蝶〉

\*蝶の羽をひろげたやうに、左右の袖をひろげて・・・

〈天草本平家物語・三二〉

\*野菊までたづぬる蝶のはね折れて

〈俳諧・冬の日〉

\*衣更着のかさねや寒き蝶の羽

〈俳諧・続猿蓑〉

\*羽と羽とを袷の袖の、染めた模様を花かとして・・・

〈近松・曾根崎心中〉

右のように、鳥ではないハネは、もつぱら蝶に使われていたが、この傾向は中古以来変わらなかつたようである。さて、ハネとハについてその意味・用法をざっと見てきたが、いちいち用例を挙げたため、かなり煩雑でわかりにくくなつてしまつた。また、上代では少し触れたが、それぞれの複合語について、中古以降は言及しなかつたので、そのこ

とも含め、以下、章を改めてわかり易く箇条書きにして振り返ってみることにしたい。

## 五 おわりに

一 現代語では、ハネが鳥や虫の「翼」および「羽毛」の意を表すのに対し、ハは大半が、ハオト(羽音)・ハバタク(羽撃く)・オハ(尾羽)などの複合語として使われている。

二 上代の場合、ハ・ハネはすべて鳥を対象とし、記紀では「羽毛」、「万葉集」では「翼」の意を表している。

三 中古になると、よみの不確かな『今昔物語集』を除いて、ハには鳥の例がなく、もっぱら虫の蟬だけを対象としている。一方ハネは、一例だけ虫の蝶についていう例があったが、あとはすべて鳥を対象にし、その意味は圧倒的に「羽毛」よりも「翼」の方が多い。

四 中世以降、ハには、前代と同じ蟬についていう例の他に、鳥を対象とするものも次第に増えて行き、意味的にも「羽毛」ばかりでなく、「翼」でも使われるようになる。そして、ハネの方は、「翼」の意はもちろんのこと、中世半ば以後は「羽毛」の意でもよく使われ、その用法はきわめて多種多様である。

五 ハとハネが鳥類について同じ「翼」の意を表す場合、ハはトツ(閉づ)・ヤスム(休む)など、どちらかというとき動的な動詞、ハネは反対に、トブ(飛ぶ)・ウチカハス(打ち交はす)など、動きのある力強い感じにあふれた動詞と併用される傾向が強い。

六 虫を対象とする場合は、ハが蟬、ハネが蝶とはっきり使い分けられている。これは、蟬というと、木にとまる静止状態のもの、蝶のほうは、花から花へひらひらと飛び回る動的なものとして捉える意識が働いていたからであろう。要するに、このハ・ハネの相違は前項の「五」にも通じるものである。

七 古辞書を見ると、そのほとんどで、ハ・ハネの両方を掲げ、ハは「羽」、ハネは「翼」を親字としているものが多い。特に『日葡辞書』では、「Faハ(羽) 鳥の羽根」「Fane ハネ(羽根) 鳥の翼」と意味の区別まで明記している。ところが、同じ『日葡辞書』には、「Fazucuroi ハツクロイ(羽繕ひ)」と共に「Fanezucuroi (羽繕ひ)」も載っている。ということとは『日葡辞書』では、ハとハネを明確に区別し得ない点もあつたものと思われる。

八 前項の「七」で記したハツクロイ・ハネツクロイのように、複合語でハ・ハネの両方が上に付くものがある。複合語については、上代の例を本文中でいくらか挙げたが、その後のものには触れていなかった。実は、ハもハネも複合語となったものは非常に多く、枚挙に暇がない。中で、ハ・ハネのいずれもが上に付くものには、左のような例があった。各語の下に記したのは、辞書も含む出典名である。

ハオト(羽音)

新撰字鏡・万葉集・山家集・太平記・日葡辞書・好色一代男・冥土の飛脚

ハネオト(羽音)

新撰字鏡・神楽歌・拾遺和歌集・詞花和歌集

ハガキ(羽搔)

古事記・貫之集・拾遺和歌集・日葡辞書

ハネガキ(羽搔)

古事記・古今和歌集・夜の寢覚・新古今和歌集・伊京集・国姓爺合戦

ハグキ(羽茎)

易林本節用集・日葡辞書

ハネグキ(羽茎)

和英語林集成

右のような例があることから考えると、ハ・ハネの使い分けは、やはりそれ程確固としたものではなく、いくらかゆれていたもののように思われる。

九 ハはともかくとして、ハネの語源はハ(羽)にネ(根)が付いたもので、鳥の羽軸の付け根の部分、いわゆる羽茎を指す。これについては、『和名類聚抄』にその説明が載っているが、実際の明らかかな文献上の用例は、今回調査した限りでは、見出し得なかった。

十 「一」から「九」にわたって、これまでのことをまとめ、新たなことは補足して書き記してきた。結局、元來は、ハネは「翼」、ハは「羽毛」の意を示す語であったのであろう。それが双方ともその用法範囲が拡大して、互いの意味領域を侵し始め、混同した状態がしばらく続くようになる。ただ、ハは単独用法だと一音の上に、助詞の「は」や「箇」「葉」「刃」など同音異義の語が多くて紛れやすい。そこで、次第に使われなくなって行き、ハネにその座

を譲って、今や複合語の中にその姿を残すだけになってしまったものではないだろうか。以上、ハネとハについて調査結果のあらましを述べてきたが、相当長くなってしまったので、大方のご叱正を期待してこの辺で筆をおくことにしたい。

注

- 1 今回の調査に際し、上代で底本としたのは、岩波日本古典文学大系本（旧版）である。
- 2 原文では、巻八の方がカモノハノイロノになっているが、巻二〇はカモノハノイロノである。ただし、元暦校本と紀州本ではカモノハノイロノとよむ旨、脚注があるので、今回は巻八の方に准じ、カモノハノイロノとハを独立させてよむことにした。
- 3 中古の作品については、公刊の索引類を元にして用例を調査したので、底本は、旧版の岩波日本古典文学大系本がほとんどになる。また、歌は『国歌大観』によった。
- 4 岩波日本古典文学大系本（旧版）『今昔物語集 一』三二六ページ、注一五
- 5 『今昔物語集文節索引』笠間書院 昭和四三年（一九一九年）
- 6 これが、注4で述べたハ・ハネ両方のよみが可能という例になる。
- 7 この例は、先に『日本書紀』の敏達天皇元年に出てきた、カラスのハに文字を書いたという記事と同じである。

- 8 『十訓抄 本文と索引』 泉 基博 笠間書院 昭和五一年
- 9 『沙石集索引』 深井一郎 勉誠社 昭和五五年
- 10 『御伽草子総索引』 榊原邦彦 笠間書院 一九九三年